



# 名古屋いのちの電話



写真 文 珠 幹 夫

心  
よ

こころよ

では 行っておいで

しかし

また もどっておいでね

やっぱり

ここが いいのだに

こころよ

では 行っておいで

八木重吉

定本  
八木重吉詩集より



## 新しい出発を前に

社会福祉法人 愛知いのちの電話協会

理事長 長岡利貞

新年あけましておめでとうございます。今年もあいかわらず「名古屋いのちの電話」の発展についてよろしくご協力のほどをお願い申し上げます。

さて、昨年10月6日、相馬理事長が急逝され、定款に基づいて、10月24日の理事会において不肖私とその残任期間、理事長を勤めることが決定いたしました。前理事長同様のご支援をいただきますようお願い申し上げます。もっとも職務を引き継いだと申しましても、まさに「乏を承ける」（その任にふさわしい人が見つかるまで、仮にその任を引き受ける）ことで、なにぶん突然のことで驚いているところです。よろしくご鞭撻をお願いいたします。

わたくしたちは、1996年11月14-16日、名古屋国際会議場で、名古屋いのちの電話の創立10周年を記念して、「第17回 いのちの電話全国研修会 名古屋大会」を主催いたしました。幸い全国各地から500人をこす参加者をえて盛会のうちに終わりました。ここでは相談員の相談スキルの向上のための研修と今後の電話相談のありかたが話しあわれました。

ことにシンポジウム、『電話は「気づき」より「依存」を深めてしまうかも知れない』では、今日の全国のいのちの電話が当面している困難な課題を正面から受けとめ、その問題点を明らかにしようと試みました。いまや電話相談は成長から成熟の段階に移りつつあり、発足当初にはなかった新しい問題がつきつきとうまれていますが、このシンポジウムは電話相談の将来を考えるうえで大きな問題提起になり、いまその

波紋は静かに全国に及びつつあります。そのこともあってか最近、いくつかの機関から「電話相談」についての、情報や技術援助を求められる事がふえてきましたが、これは私達の運動が市民権を得つつあることを物語っており、社会的な責任がますます重くなっていることを感じているところです。このようなことも、日頃わたくしたちの運動をお支えいただいている皆さんのお励ましのおかげと心から感謝申し上げます。

わたくしたち「名古屋いのちの電話」はこの大会を機会に、内には組織の活性化、外には賛助会員の拡大へと大きく発展しようとしています。十年も経てばどのような組織でも硬直化や陳腐化を避けるわけにはまいりません。この問題については全国大会を機に相談員の中からも積極的な意見が盛り上がり、研修のあり方その他について新しい動きがはじまっています。理事長の交替を組織の見直しと革新のまたとない機会ととらえ、これらと呼応しながら、新しい課題と取り組んでいきたいと考えています。さしあたって、まず理事会に新しい理事をお迎えしてこれを強化し、また評議員会に相談員はじめ、その他気鋭の方々を加えて、大所高所からご意見をいただくことを考えています。

また念願である受信24時間体制に向かって一歩を進めるのも大きな課題です。これについては、相談員のみならず関係各方面のお力添えをいただかなくてはなりません。あわせてご協力よろしくようお願い申し上げます。

最近、モンゴル、チベットへ2回の旅をした。どちらも中国の辺境に在り、遊牧の民が生活している。生活は質素、人の表情は微笑み、自然はそのままである。私は、ふらふらと草原を歩き、とぼとぼとラマ教寺院を巡る。そして電話と無縁の世界に居る自分に満足している。そんな時、心に浮かんだことを記してみる。

日本、欧米からの旅人は、空港・ホテルの国際電話ブースから近況を家族に伝えていた。まめである。人は、慣れ親しんだ所から物理的距離が増大すると不安になるのだろうか。草原のレストランで、ラサの町で電話を使っているモンゴル、チベット族の人を見なかった。だが北京、上海、成都の漢族の人々は、電話好きのように感じられた。ビジネススーツを着た男、若い男女が携帯電話を手にし、使う姿をよく目にした。日本の中高生の「ピッチ」と言ったファッション感覚に似た風景である。

私は、電話は嫌いなのに、お節介にも広大な草原での生活、故郷を離れての巡礼の人々にとってこそ、携帯電話は必需品と思った。私の電話嫌いは、正確に言うと、掛かってくる電話が嫌いで、掛ける電話は好きでも嫌いでもなく便利であり、重宝している。自分の要件を伝えることは良い。だが、他からの受入れは否である。電話による受容性はすこぶる未分化で、電話を上手に使いこなせない。それは文明の放った電話ウィルスに犯され、その免疫不全の状態にあると言うことであろう。

そこで私は、電話ウィルスに犯されていない彼らがうらやましい。悲しいかな今の私は、電話を手放すことができない。彼らが私と同じように電話を身近に置き、使うことになったらどうなるか。多分、放牧、巡礼にと忙しくなるであろう。電話は、人と自然との共生の中で育んだ魂を、奪うのであろうか。

若い男女は、馬で2～3日駆けて寄り添うと言う。巡礼は、数カ月、何年も続くと聞く。死を恐れる人はなく、死は喜ばしいこととする生死観。私は、その世界から離れて暮らしている。

電話は、今ここでの伝達を現実的、即時的に行ってしまう。電話は人と人の関わりに大きな変革をもたらした。コンピューターによる情報ネットワークが地球規模で張られつつある。電子機器による情報の伝達システム。その絶大な力は、

モンゴル、チベットに及ぶであろう。

彼らの生活の生業は、徹底した質素な合理主義であり、その心は、世の動きがどうあれラマ教への信仰は厚く、深く、揺るぎがない。そして文明の機器と、その仕組みへの好奇心はすこぶる旺盛。何台もの日本製最新ランドクルーザー、オートバイ、ラジカセから流れるポップス。合理主義と宗教が渾然一体となり、その矛盾を感じさせない。

いち旅人の恐れは、この数年の間に起こるであろう。電話ウィルスは先ず都市を襲い、その周辺へと。手間暇かけた対人交流が途切れるかもしれない。即物的な情報交換による人間関係の疎外の病理の発生は、一時のことであろうが。

電話という道具に非はない。その恩恵ははかり知れない。電話ウィルスは、道具の使い手の心を棲家とする。その正体は、謎である。現代社会の心の病理の顕在化は、道具・技術を使う者の心、その在り方にかかっているのだろう。

私の旅は、「朋有り遠方より来る」の反対の「朋有り遠方より訪ねる」であった。そこで実感したことは、彼らの意識と無意識が柔軟な関係を保ち、その全体性の逞しさにあった。それは、姿、形のない確かな、内なる心の電話回線と呼べるものであった。

私の旅は、「朋有り遠方より来る」の反対の「朋有り遠方より訪ねる」であった。そこで実感したことは、彼らの意識と無意識が柔軟な関係を保ち、その全体性の逞しさにあった。それは、姿、形のない確かな、内なる心の電話回線と呼べるものであった。

(訓練スタッフ・はこ心理教育研究所 所長)

## モンゴル、チベットの電話



亀井敏彦



心の健康公開講座

## 「生きることそして死ぬこと」(要約)

講師 川原 啓美

### ◇ 患者さんに教えられる

私は医者で、今までたくさんの患者さんに出会ってきました。その患者さんのある方はお元気になって、また社会生活に戻られますし、またある方はそのままその一生を終わられる方もございます。その毎日の経験の中で患者さん達と出会って、人間としての生き方を示されるというか、教えられるという事が私自身よくあります。

### ◇ 死について考える

私が小学校の5年生ぐらいのとき、下痢をしてずいぶん苦しくて2~3日寝たことがありました。そのときふと、このまま死んでしまったらどうなるんだろうということを思ったんです。1年半ぐらいして、小学校6年生ぐらいの時だったでしょうか、私なりの結論が出たんです。それは「あ、死ねば生まれる前と同じことになるんだ」というのが私の結論だったんです。生まれる前の事というのは、自分はいくら考えてもわからないんですね。だからまた、そこの所へ戻って行くんだから別にそう恐ろしいことはないんじゃないか。というように、一つの私なりの結論を一生懸命考えて出したんです。

実は、その後、1970年ぐらいになってから、医者としてアメリカにおりまして、アメリカのある小学校に、私の勤めている病院から予防注射に行ったことがあります。そして、他の教室のようすを見ていました。先生に「あそこで一体何をやってますか」と言ったら、あそこのクラスでは「死の教育をしている」と答えたのです。日本でも最近、死の準備教育をしなければならないということがわかってきて、いろいろと言われておりますけれども、そういうようなことが、自分の

「死」というものを考える準備の段階としては非常に必要であるということです。

### ◇ 医療とは

医療というものは、延命のためにするのではなくて、生活の質を高めるためのケアをするのが医療なんだというふうにだんだん考えが変わってきました。治療はキューアといいますけれどもキューアからケアへという言葉が1970年代に出てきたんです。

私は1976年にネパールへ行きました。そして、ネパールの病院で短期間ですが外科医として働きました。実際どういう患者さんがいるのだろうかということで、患者さんのリストを見せてもらったんです。そうすると、おかしなことに気がついたんです。というのは、病院で亡くなる患者さんというのは、ほとんどいないんです。それで「みんな治っちゃうかな」と思ってよくみると、「重症になったので退院した」と書いてあるんです。重症になったから退院するというのはどういうことかなと思ったんですが、それはそのあと私が患者さんをみていて、とても病状が重くなって、もう明日ぐらいかなというとき、患者さんと家族が自分から退院して行くんです。

そういう方たちはどこへいくのかといいますと、川へ行くんです。川ってどういう意味があるかといいますと、ネパールの川というのは全部南に流れます。そしてインドに行ってガンジス川になります。ネパールの人はほとんどヒンズー教徒ですから、ヒンズー教の人にとってガンジス川というのは聖なる川なんです。亡くなるときに、ヒンズー教では来世ということを一生涯懸命信じています。幸せな来世を得るためにはガンジス川の水に身体の一部をつけて、そして亡くなるのが幸せな来世につながる一つの条件だということです。だから病院ではみんな死にたくない。ですから、退院していく時に患者さんも家族も死ということをきちんと覚悟して、そしていかれるんです。これも私にとっては大きな一つの経験でした。

### ◇ ホスピス運動

1970年代ぐらいから日本でも死に対する考え方というのがだいぶ変わってきて、かなりおおっぴらに死について語るということができるようになっ

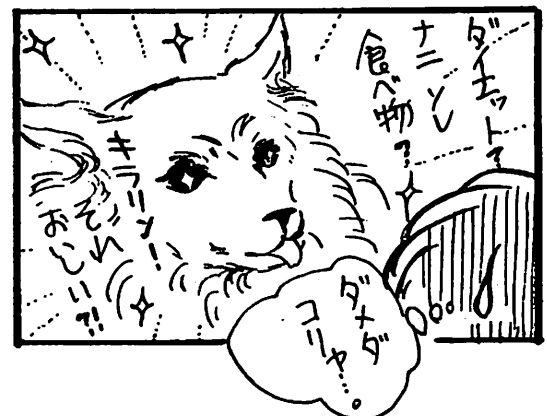
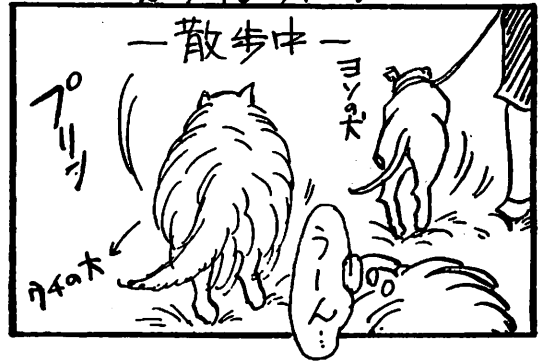
てきました。死というものはただ黙っているのはよくない。むしろその人がどれだけ生きられるかということをお願いすることによって、もっといきいきと生きられるのではないかということがだんだんとわかってきたんです。そこで、医療界でもただ延命のために、病名をひた隠しにして治療するのではなく、もっと患者さんと一緒に、患者さんのために、どういうことが一番必要なケアかということを考えるというように変わってきました。

その中からでてきたのがホスピス運動なんです。近代的なホスピスというのは1967年にイギリスのロンドンにセントクリストファーホスピスというのができました。これはつくられた方がシシリソンダースという方で、この方は看護婦で麻酔医でもある方だったんですけども、この方がつくりました。どうしてかという、痛みを和らげなければならない。痛みがあると人間は尊厳を持って生きることができない。だから何とかして痛みをとろう。その痛みはただ肉体的な痛みだけではなく、彼女の言葉では「トータルペイン」という言葉を使っています。肉体的な、精神的な、社会的な、霊的な痛みというものをとることによって、その人が本当に人間として豊かに生きられるようにしていく。そのためにモルヒネなどの鎮痛薬をもっとしっかり使うという事を考え出したわけです。

ホスピスというのは死に行くところではない。はっきり言えば、その人らしい生を全うさせるための全人的なケアができるところであるというように私たちは思っています。たくさんの方の生を終わられるのを見送るわけですけども、そこでつくづく思うことは、やっぱり人は生きてきたように死んでいくのだなあと思います。ですから、自分の有限の生を自覚する。無限に生きられる人はありませんから、その有限の生を自覚して生き生きと生きていくことが必要である。そのためには、自分自身の死への準備をする。その死への準備がしっかりとできていれば初めて生き生きと生きられるのではないかと思います。

(アジア保健研修財団(AHI)理事長)  
愛知国際病院 院長

(文責一編集委員会)



## ご援助ありがとうございました

1997年10月1日より12月末日までに下記の方々から暖かいご支援をいただきました。一同深く感謝いたしますと共に報告申し上げます。(順不同・敬称略)

なお、上記期間内に何度もご寄付くださった方もお名前は1回にさせていただいております。

社会福祉法人愛知のちの電話協会

理事長 長岡 利貞  
財務委員会

### 【賛助会員A】

山堀尾田金菅背佐々	口田崎村澤原木木	眞正幸茂 美恵武	人俊夫子強子子昭	大田會伊中近前豊田	矢中澤藤川藤田幹司	和俊美幸昭正郎・彬子	徳良三子子二子彬子	加高笠服須須鈴山	藤木井部田木田	迪康康み静武正	春秀助み代二義	鈴木木澤高柳文	木口島村田原珠川村敏	郁芳正 邦佳紀久雄	雄己司修彦枝野	前森兒森植北大徳寺	島岡島松島	和竜茂從郁恭久間敬	幸銀雄也爾子子止
-----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	------------	-----------	----------	---------	---------	---------	---------	------------	-----------	---------	-----------	-------	-----------	----------

### 【賛助会員B】

安平宵子佐柴亀大斉大菅本	藤田山安木田山隅藤塚原田	知た崇 和千甲延博真健	津つ子子文雄敏子子吾枝子弓次	寺柳岩伊田杉小神西山安浜	田澤田藤沼山室戸村本藤本	仁幸邦恵 志美一 秀妙幸	計輝子子育乃子子親樹子子	小西末五堀竹宮村広神飯町	尾川田藤尾村里瀬野野塚田	雅道香昭勇綱及政善啓三隆	彦子里子夫子子久子子哉	石笠小石遠服直官和山菅布尾	垣原田山部井下久田原村関	栄義千昭 真英美和明静	三覚人子子豊昭子子夫二枝	加伊持服兼黒岸伊大菅福藤	藤藤田部田田 藤森原田次郎	幸と宣紀智忠正み正芳忠	雄子夫子彦嘉倫子樹樹徳江
--------------	--------------	-------------	----------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	-------------	---------------	--------------	-------------	--------------	--------------	---------------	-------------	--------------

### 【賛助会員C】

片石鬼河浜森森武水松藤島岡	岡川頭田野 嶋沢村原居田	倭と鏡い正昭泰恵み陸葉平喜	子子郎を子子浩子子子和江	早浅松神宮武山松柳湯林タイス橋	川野浦尾田岡本田生瀬	律記三初喜智善一球美温へ鉦	子子夫子子子郎路子子江ガ一	河大平鶴薄細北粟小藤高寺棚	村野野田口川條田出田橋井橋	公邦隆和キ美と美芳和栄か千	子忠市子子子子子典男一子子	岡野小加村山花小松佐林矢榎	部村川藤上田村田永藤 野本	妙邦み賢恵三紀靖辰周啓正	治子泰き三子枝子子一子郎子	神島太西山柏山細服中武小渡	谷村田尾下見田江部谷下幡辺	将春重 恭秀武繁伸塩潤美登邦	弘美一潔子敏昌幸枝子子里俊
---------------	--------------	---------------	--------------	-----------------	------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	--------------	---------------	---------------	---------------	----------------	---------------

## 点滴

文字どおり点滴についてかいてよいものか。しかし、これも何かの機会と思います。私の父が7年前に、それも自宅で82才で死にました。人もうらやむ楽往生でした。でも、私としては、病院へ運び、たとえ点滴一本でも、注射一本でも、介抱してもらって……の思いでした。このことはしばらくの間私の心にわだかまっていました。半年もたったころでしようか曾野綾子さんが、御夫婦とも信仰厚い方ですが、週刊誌に親に点滴をしてやりたかったと。するとお医者さんが、人間は口から栄養をとるのが本来だから点滴はしない方がよいと。私と全く同じ思いの人がいることに驚き、私は救われたと感じました。

さて、父が楽往生するとは思っていませんでした。極道の人で家族を泣かせ、困らせた男でした。結核をやったのにタバコを死ぬまで放さず、のどをかきむしって死ぬだろうと思っていました。6日ほど寝ていましたがスポーツドリンクばかり飲んでいました。点滴を打つようにいいましたが聞き入れません。ブドウ糖を一さじ入れるようにさせました。これはよく効くのです。結構元気そうでした。死の当日、はじめて、偶然一つ余っていた紙おむつをさせ、さて、この先看病をどうしようと仕事を休む順などを兄弟たちで話し合っていました。それでも楽天的な家族はお茶を飲みながら談笑していました。その時死にました。苦しみもなし、下の世話もなし、まるで木喰の上人のような、覚悟の自死のようでもありました。最期の時だけ明治生まれの人らしい男でした。(M・F)

北條 献示  
西野友英・三緒子

岩佐敏志  
日本キリスト教団南山教会婦人会

梅沢 晴美

【寄付金】

中小島 三郎 高橋 丈郎 豊田 多江 相馬 江美 見馬 貞蔵 篤木 靖美 志者	内山 川正 山 下昌 石 田弘 中 田幸 西 川子 成 川子 横 木子 井 公	邦子 幸子 子子 子子 子子 子子 子子 子子 子子 子子	山田 正代 谷 口江 西 沢利 児 島正 松 浦竜 志 村あ 林 志江	山 口眞人 岩野 一郎 服部 英身 鈴 木拓 野 上子 三 井よ	津大 秋山 村 橋下 俊 田保 充 京子 や 子彦 あ 輝博 た 輝博
---	--	---	---	---	---

北区弘教会「心の購座」参加者 日本キリスト教団東海教会 日本福音ルーテル名古屋教会  
ルーテル幼稚園父母の会 ボーイスカウト名古屋第98団 ガールスカウト名古屋第58団  
川崎いのちの電話 リチャード・メロリット (株)名古屋花き卸売市場 聖母カテキスタ会  
知多市立看護専門学校自治会 カトリック尾西教会 日本同盟基督教団愛宕山教会婦人会  
東海レディスプラザ 在日大韓基督教名古屋教会婦人会 日本キリスト教団愛知教会  
日本キリスト改革派八事教会 八事聖霊幼稚園 幼き聖マリヤ修道院 井上幼稚園

【クリスマス歳末募金】

林 郁子 鎌 敬一 鍬 貞次 安 律子 伊 藤英 宮 里及 長 野一 牧 岡恒 神 戸一 山水 久 大 野愛 松 橋玲 河 村睦 藤 原久 梶 原菜 山 正 寿 義	大岡 矢和 榎 崎本 田 覆久 豊 田理 佐 野恵 長 倉百 河 野久 神 田登 武 野陽 中 伊野 福 藤悦 野 村昌 柳 村絃 野 林佳 林 温 満 田篤 川 重	徳子 江彰 美 理子 百合 子 登喜 子 陽子 子 恵子 子 悦み 子 昌 男子 絃 枝 温 江 篤 二 重 男	野村 妙子 伊 藤昭 五 藤敦 鈴 木敦 多 和信 坂 山幸 岸 東口 念 寺三 飯 塚重 横 井公 白 田治 小 澤辰 佐 藤一 高 橋一 加 藤倫 尾 関静	松 浦三 梨 中千 中 秋三 多 和田 森 堅大 粟 近平 浅 神飯 神 飯鈴 梶 平	浦 三夫 辻 千代 田 三子 多 和子 森 堅子 大 粟子 近 平子 浅 野子 神 尾子 飯 木子 鈴 浦子 梶 野子	宮 木 加 藤 山 下 山 浦 浦 橋 橋 岩 金 山 山 相 竹 坂 坂 島 水 石 小 笠 小 平	靖 子 み 恭 み 桂 子 良 子 亮 子 今 子 朝 子 京 子 康 子 宏 子 康 子 平 子 享 子 美 子 代 子 祐 子 昌
--	---	---	---	---	--	---	---

正勝本松の会ヨナ 日本キリスト教団半田教会 日本キリスト教団春日井教会 日本キリスト教団熱田教会  
熱田教会婦人会 日本キリスト教団熱田教会 日本キリスト教団熱田教会  
エイコー 金城学院高等学校 カトリック五反城教会  
有 聖心女子修道院 押切カトリック教会 社会福祉法人聖霊病院  
松田一路 幼き聖マリヤ修道院 聖霊奉待布教修道女会 聖園天使園  
中京教会婦人会 日本キリスト教団名東教会婦人会 日本キリスト教団名古屋西教会  
岡崎教会 ドミニエ会聖ヨゼフ修道院

【賛助寄付】

株式会社東海銀行 株式会社シンワ 株式会社岡田パテントサービス 株式会社オチアイネクス カルビー株式会社名古屋支店 中村産業株式会社 アケボノ棺仁葬具店山田 株式会社高津製作所 宝交通株式会社森博一 株式会社丸政 フタバ産業株式会社 川北電気工業株式会社 株式会社名古屋銀行 杉山工業株式会社 豊田合成株式会社 NTT中部電話帳株式会社 株式会社オティックス ホーユー株式会社 アスゲン製薬(株)釜戸工場 アラコ株式会社	名古屋鉄道株式会社 株式会社両口屋是清 トヨタ自動車株式会社 理研産業株式会社 株式会社杉浦製作所 名古屋トヨベツ株式会社 黒金化成株式会社 株式会社ワーロン 東邦ガス株式会社 万能工業株式会社 堀江金属工業株式会社 新明工業株式会社 西批工業株式会社 株式会社榎屋 株式会社松坂屋 愛三工業株式会社 新日本製鋼株式会社 愛知製鋼株式会社 釜戸工場 宝泉寺	中部電力株式会社 株式会社トヨタレンタリース名古屋 名東歯車株式会社 株式会社陣内工業所 株式会社東海通信資材サービス 豊田総建株式会社 株式会社三秀ブレンジョン 株式会社ミヤタコーポレーション 株式会社伊藤工務店 小島プレス工業株式会社 大島造園土木株式会社 舘定株式会社 株式会社フジトランスコーポレーション 豊田紡織株式会社 アサダ株式会社 株式会社デンソー 中部トヨタリフト株式会社 トヨタ車体株式会社	株式会社アラキ製作所 名証正会員協会 株式会社青山製作所 株式会社高木製作所 セキセイ株式会社 株式会社サンゲツ 株式会社猪村工業株式会社 日本電話施設株式会社 岡谷鋼機株式会社 尾張精機株式会社 尾作建設工業株式会社 豊田通商株式会社 株式会社芝岡製作所 豊田自動織機製作所
---	---	--	---

【助成金】

愛知県共同募金会

# チャリティーコンサート

と き 1998年2月19日(木)18:30開演  
 ところ 電気文化会館ザ・コンサートホール  
 出演 フルートアンサンブル 葦笛の会  
 プログラム 日本のうたメドレー  
 世界の民謡メドレー他

主催 福会福祉法人愛知いのちの電話協会  
 後援 NHK厚生文化事業団  
 中日新聞社会事業団  
 入場料 2,500円(当日3,000円) 全席自由

## 愛知いのちの電話協会日誌

- 10月2日 ベルの会(新旧世話人)  
 3日 総務委員会  
 6日 相馬信夫理事長逝去  
 9日 相馬信夫理事長葬儀式  
 13日 訓練委員会  
 19日 フリーマーケット(東別院)  
 20日 三委員長会議  
 24日 評議員会・理事会  
 25日 かんぼ「心の健康公開講演会」  
 講師 川原啓美先生
- 11月1日 ケース研修会  
 11日 10期(A)認定委員会 認定式  
 12日 愛知電話相談ネットワークの会  
 13日～15日 全国研修会 熊本大会  
 17日 訓練委員会  
 27日 総務委員会  
 29日 岐阜いのちの電話  
 かんぼ「心の健康公開講演会」
- 12月1日 ベルの会  
 8日 訓練委員会  
 10日 名古屋市民生局監査  
 20日 事務局大掃除  
 29日～1月3日 年末年始 事務局休業

## 賛助会員を募集しています

ご協力をお願いします

いつも資金ボランティアとして会費やご寄付をいただき有難うございます。心から御礼申し上げます。年間2,000万円の運営資金と共に、法人の基金を10年間で1億円積立の課題を与えられております。会員の皆様の倍旧のご支援と共に、会員増加の運動にもお力を添えて下さいますようお願いいたします。社会福祉法人として寄付金の税法上優遇措置が受けられます。誠に失礼ですが振込票を同封させていただきます。ご利用くだされば幸いです。

(1) 法人会費 年間5万円・10万円・20万円

(2) 賛助会員(年間1口)

A 10,000円 B 5,000円 C 3,000円

(3) 一般寄付はご自由な金額で結構です。

(4) 夏期・年末寄付

口座名 社会福祉法人愛知いのちの電話協会

口座番号 東海銀行大津町支店(普)477029

郵便振替口座 00810-8-53758

お問い合わせは…

社会福祉法人愛知いのちの電話協会

名古屋いのちの電話

事務局 ☎ 971-5181

社会福祉法人愛知いのちの電話協会

1998年早春

名古屋いのちの電話

〒461-8691 名古屋東郵便局 私書箱第257

1998年2月1日発行

事務局 ☎ 052-971-5181

郵便振替口座 00810-8-53758

発行人 長岡利貞

相談電話 ☎ 052-971-4343

東海銀行大津町支店(普)預金口座 477029

編集人 広報委員会